

2014

慶應義塾大学  
湘南藤沢キャンパス(SFC)  
フランス語研究室

# フランス語海外フィールドワーク奨学金

## 2014 年度報告書



## ご挨拶

「フランス語海外フィールドワーク奨学金」は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の学生に対し、フランス語圏に関連する何らかの研究テーマを自ら設定し、フランス語圏の現地に赴き、大学で学んだフランス語を駆使してその研究を遂行することを奨励するとともに、資金面の援助をおこなうことを目的とする基金です。学生のフィールドワークの時期・期間については、通常3週間から1ヶ月、夏季あるいは春季長期休暇中と想定しております。

SFC フランス語セクションがこの基金を設立したのは2014年1月です。これを発案し、且つ設立のイニシアティブをお取りになったのは、長年当該セクションで活躍されて当時定年退職を間近にしておられた古石篤子教授(現在は名誉教授)です。発起人には、古石先生は勿論ですが、SFC設立当初に古石先生の先輩であり同僚であられた井上輝夫慶應義塾大学名誉教授と三浦信孝中央大学教授(現在は名誉教授)にもなっただき、現役専任教員として國枝孝弘と私、堀茂樹が加わりました。そして幸いにも、有志の方々から計48万円もの寄付を頂戴することができました。

さっそく奨学生を公募したところ、少なくない数のSFC生が研究計画書を作成して応募してきました。私どもSFCフランス語セクションの専任教員による厳正な審査の結果、「プロジェクト型協働学習としてのタンドムラーニングの実践」を企画するという藤谷悠君(現在、慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程1年在籍)と、「コンゴ民主共和国における部族主義の社会的役割の考察」を研究するという牧野創君(現在、慶應義塾大学総合政策学部4年)が初年度の奨学生と決まり、2013年大学年度末に相当する2014年2月～3月にこの二人が各々渡航しました。

二人は丁寧に準備した上で旅立ちましたが、それぞれ予想外の事態に遭遇し、困難に直面したようです。しかし、両名ともめげることなく当初の計画を最大限実行すべく奮闘し、不完全ながらも充実したフィールドワークを遂行したようです。このささやかな小冊子にまとめたのは、その藤崎悠君と牧野創君の報告書です。われわれ教員が手を加えること、添削することはあえて避け、100パーセント、二人がそれぞれ作成したままの形でここに提示いたします。2015年7月22日の「海外フィールドワーク報告会」での両名の口頭発表に伴うものとしてお納め下さい。

学生二名をフィールドワークに送り出すためにお力添えいただいた方々に心から感謝申し上げるとともに、もし今後も引き続き「フランス語海外フィールドワーク奨学金」へのご支援をいただくことができればたいへん有難いと存じる次第です。

2015年7月20日

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス、フランス語セクション、  
堀茂樹(文責)、國枝孝弘、宮代康丈、パトリス・ルロワ

プロジェクト型協働学習としてのタンデムラーニングの実践  
～日本人学生とフランス人学生による映像制作活動を通して～

政策・メディア研究科・修士課程1年

81524907

藤谷 悠

## 1. 目的と動機

今回のフィールドワークの企画は、現在個人研究として行っているタンデム学習の実践に参加してくれた、とあるタンデムコンビによって行われたプロジェクト型協働学習の形態を持った活動の実例から着想を得た。タンデム学習とは、外国語の学習者同士がお互いの母語と学習言語を用いて言語交換型の相互学習を行う活動である。私はこのタンデム学習の運営と実践を通して、学習者たちに他者との生身の交流による自己変容をもたらす契機を与えたいという思いを基にして研究を続けている。このタンデムコンビによって行われたプロジェクト型協働学習は、お互いにカメラを得意とする学習者二人が協働し、まるで空を飛んでいるかのような「トリックアート写真」を創り上げたというものである。二人はお互いの学習言語のレベルが双方共に初学者程度のレベルであったため、言語コミュニケーションの面では難があるコンビであった。だが、そうした言語的に困難な状況があるにもかかわらず、この作品を産み出すまでの過程でお互いに打ち解け合っていた。二人のコミュニケーションは言語コミュニケーションに依拠することが出来ず、基本的なやり取りの際に交わす言葉はごく平易なものに限られていたが、いざ作品を創る段階に入ると、身振り手振りでお互いの感覚をすり合わせたり、共通の知識である(非言語ツールとしての)カメラや編集ソフトを用いたりするなどして、作品の完成までに様々なコミュニケーション方法を用いて密にやり取りを行っていた。こうした実例が示すような、異文化交流におけるコミュニケーションの在り方を学習者に再考させる、「創作活動を伴う協働学習」を他のタンデム学習活動でも実践し、その有用性を考察するというのがこのフィールドワークの目的である。

## 2. 活動概要

1 で述べたような背景を基として、今回のフィールドワークで行ったタンデム学習とプロジェクト型協働学習を組み合わせた活動は、「映像作品の創作活動」である。映像作品は日本語版とフランス語版の二種類を作成し、日本語版の脚本・演出は日本人学生が行い、その脚本を元にフランス人学生が出演者として演じる。フランス語版はその役割を逆にして制作する。また、映像作品の共通テーマとして、「それぞれの国の文化性を感じる場面」というテーマを筆者が設定した。共通テーマを設定した理由は、学部時代の研究において、タンデム学習の活動時における困難点として参加者から多く挙げられた、「何をどのように活動すればいいのかが分からなかった」というフィードバックを考慮してのことである。これは、教師が居ない教室外で行われる学習者同士の自律的学習活動であるからこそ生起する困難である。そうした難点を参加者たちに与えないために、コーディネーターやファシリテーターが仲介者となり、活動をより快適に行える仕組みを用意することが寛容であると考えた。今回の映像制作にあたって、上記のような細かい活動ルールを設けたり、映像のテーマ設定という部分において大枠だけでも共通テーマを用意したり、またそれぞれの活動実践の場においてファシリテーターとして筆者が参加したりしたのは、そうした活動時の難点を乗り越えるための仕組み・環境作りを志向してのことである。

制作の行程は、タンデムグループを組む両者が初対面の場合は、まずお互いに自己紹介を行ってもらう。その段階から、言語交換を意識してもらうようにする。次に、コーディネーターとしての筆者が、上記したような活動内容を参加者たちに説明する。その後、それぞれの脚本作成に取りかかってもらう。脚本が完成した後に、それぞれの脚本を相手に見せ、その国の文化圏で生活する側にとっておかしな点や気になる点は無いかを校正してもらう。この行程を盛り込むことにより、異文化間コミュニケーションという課題にもより深くアプローチ出来るようになると考えた。その後、その脚本を基に、それぞれの映像作品を撮影する。

本活動に参加してくれた参加者たちは、日本側のメンバーが、フランスに滞在中の日本人学生たちで、フランス側のメンバーが日本語を学習中のフランス人学生たちである。この二者間の組み合わせによって、タンデムグループを形成した。活動場所は、ボルドー、パリ、リールの

三カ所に渡り、それぞれ現地に滞在中の学生たちに活動に協力してもらった。

活動内容の記録は、参加者たちに許可を取り、実際に作った映像作品の映像とは別に記録映像として撮影させてもらった。また、活動中に使ったメモや実際に完成した脚本も、研究資料として参加者たちから頂いている。今後の個人研究においては、この記録映像を元にした活動時の参加者たちの様子を分析・考察することも視野に入れている。

### 3. 活動詳細:ボルドー

ここからは活動の詳細を、各地での活動ごとに振り返っていく。まず、最初に活動を行った場所は、ボルドーであった。ボルドーで活動に参加してくれたのは、現地で語学研修中の日本人学生・S と、ボルドーの大学で日本語を学習中で、今年の秋から日本に留学予定のフランス人学生・M である。この二人は、今回の活動が始まる一週間ほど前から、タンデム学習を個人的に開始しており、既に個人間での交流は深まっている様子だった。言語レベルにおいては、S はフランス語の中級レベルの学習者であり、M は日本語の中上級者程度のレベルであり、言語交換の面においてはどちらもバランス良く使える状態であった。このタンデムグループが、共通テーマを元にして選んだテーマは、S が「日本人が持つ外国人英語話者に対する恐怖について」で、M が「日仏のファッションの違いについて」である。撮影時には、参加者たちの要望もあり、筆者もキャストとして参加した。テーマを決めるまでの会話や、撮影に参加するといった過程を通して、仲介者としての筆者も学びの場を生成する一員として参与していることを実感させられることとなった。



図 1：脚本を作成する M

#### 4. 活動詳細:パリ

パリでの実践は、現地に留学中、および語学研修中の日本人学生たちと、各グランゼコールに在学中のフランス人学生たちとの間で行われた。

パリにおける活動実践の大きな特徴は、1対1の組み合わせではなく、参加者全員が日本側・フランス側に別れて一同に参加する形で、複数人グループ型のタンデムが形成された点にある。コーディネーターとしての筆者が当初想定していたのは、それぞれに1対1のコンビを形成してもらう形であったが、実際の活動の流れの中で、参加者たちから、全員参加型の形が望ましいとの意見があり、それを優先することにした。この決断をした理由は、私が、「自分の研究を進捗させる」という表層的な目的よりも、参加者たちにとって本当に意味のある活動をしてもらいたいという実践重視の志向を持っているからである。自らの研究に利する形の研究結果を求めるのであれば、全て統一した形式、つまり1対1の形式で全ての活動を行えば、後の分析・考察作業において比較検証する際により有効なデータとなるであろう。しかし、それは参加者たちを、私の研究の「モルモット」として活用するための形式でしかない。自分の研究に参加して手助けをしてくれる人たちにこそ、自らもまた意味のある活動をフィードバックすることが出来なければ、他者同士の交流からの学びを促す実践教育を志向する研究者としては失格であると考えている。だからこそ、参加者たちが自律的に構築しようとする学びの形を「整形」することなく、あくまでもそれを促進する(ファシリテートする)存在として、その場に関わっていく事が私にとっては肝要なのである。



図 2 : 脚本の内容を話し合うフランス側メンバー



この複数人グループ型の実践がもたらす学びの特徴として、日本人・フランス人という関係性だけでなく、日本人同士・フランス人同士の間でもまた、同様に相互的な学びが起きているという点についても特筆すべきである。タンデムのパートナーとなる相手の文化性に思いを馳せるという行為について、自分の考えだけでなく、同じ文化圏で生活してきた他者の視点から、それを相対化する機会がもたらされる。それにより、まず同質性の中から抽出される差異に目が向くようになり、またそれは翻って、他者性の中にある共通なものにも意識が働くこととなるだろう。

このタンデムの参加者たちが設定した作品のテーマは、日本側が「フランスの店員の接客態度と同性愛について」、フランス側が「日本の会社での諸風景」である。どちらのグループの側にも、演劇経験者や映像制作に特化したメンバーがおり、作品の創作過程においては、彼らがリーダーシップをとって、グループを活性化し、撮影の際にもアングルや録音にこだわりを見せるなど、創作活動の面でもより本格的な実践になった。



図 3：制作の合間に交流を深める日本側メンバー

## 5. 活動詳細:リール

リールにおける実践は、現地滞在中に急遽決まったものとなり、筆者の大学 1 年時からの友人である日本側参加者・C の協力の下で行われた。C はかつて筆者と共に、ルーアンのアリアンス・フランセーズで語学研修を受けていた学生で、日本の大学を卒業した後に再度渡仏し、

現在はリールの大学院に通っている。その大学院の友人であるフランス側参加者・Iとのタンデムにより、活動が行われた。作品のテーマは、Cが「パンをコーヒー・紅茶に浸して食べるフランス人」、Iが「言葉が表層的で態度に裏がある日本人」となった。

Cの脚本制作過程においては、Iが当該テーマに対して、自国の文化圏について補足を加える場面があった。キリスト教徒にとって、パンはキリストの肉体の一部として考えられている重要な食材であり、だからどんなに固くなっても捨てることは無く、スープや飲み物に浸して柔らかくして食べるのであると説明した。Cはそれを知らなかったため、それまであまり好意的に思っていなかった、フランス人がパンを浸して食べるという文化に対して、理解を示したようであった。異文化間交流を促す仕組みとしての脚本校正の行程が、功を奏した場面であったと言えるだろう。



図 4：リールの公園で活動を行う C と I

## 6. 総括

今回のフィールドワークを通して私が感じたことは、活動に伴う「楽しさ」であった。「楽しさ」、と一言でまとめてしまうと、なんとも安易で空疎な印象を与えるかも知れないが、学習活動を実践するということにおいて、この「楽しさ」が伴うことは、何より重要なことではないかと私は考える。特に、教室外で学習者のみで自律的に行われるタンデム学習のような活動においては、それが無ければモチベーションの持続すら難しくなるのではないだろうか。4の項にて先述し



た通り、「参加者たちにとって本当に意味のある活動をしてもらう」という目標を据えていた私にとって、参加者たちへの事後のインタビュー調査において、全ての参加者から「楽しかった」という趣旨の回答を得られたのは、何よりの研究成果であると自負出来る。そして、各現場に参加している中で、自分自身もまた「楽しい」と思えたのは、大変嬉しいことであった。こうした実りある活動が行えたのは、快く参加してくれた参加者たちのおかげである。彼らに今一度、心より感謝したい。これからの研究活動においても、こうした実感としての「楽しさ」を実践と共に創出していくことを、常に心がけていこうと思う。

## Le résumé

Ce que je me suis proposé d'effectuer dans le cadre de mon travail de terrain, ce fut une innovation dans ce qu'on appelle le « Tandem Learning » des langues vivantes, et ce, notamment entre les japonophones qui apprennent le français et les francophones apprenants de la langue japonaise.

En allant à Bordeaux, à Paris et à Rouen donc, j'ai chaque fois réuni, d'une part, un certain nombre d'étudiants français qui étaient déjà plus ou moins initiés au japonais (groupe A) et d'autre part, de jeunes Japonais qui y séjournaient pour améliorer leur français qu'ils avaient plus ou moins bien acquis au Japon (groupe B). Une fois constitués ces deux groupes, j'ai d'abord fait écrire à chacun de ces groupes le scénario d'un sketch en sa langue maternelle et ensuite fait jouer dans leur langue d'apprentissage un autre sketch selon le scénario écrit par l'autre groupe. Ainsi, ce fut au groupe A de mettre en scène les jeux du groupe B et de les filmer en vidéo, tandis que le groupe B se chargeait de la mise en scène et du tournage en vidéo des jeux du groupe A.

Avec ces activités, les participants ont été amenés à faire des communications interculturelles, tout en améliorant en pratique leurs langues d'apprentissage respectives. Reste à souligner qu'ils ont tous trouvé du plaisir dans ces activités de « Tandem Learning » ainsi innové.

Hiroki Fujitani

# フランス語圏海外フィールドワーク

## 報告レポート

### 「コンゴ民主共和国における部族主義の社会的役割の考察 ～多部族都市としてのキンシャサの事例を用いて～」

慶應義塾大学 総合政策学部 4年

牧野創

#### <目次>

はじめに

1章:研究概要

2章:研究背景

3章:春期フィールドワーク

4章:考察と今後の展望

おわりに

#### はじめに

今回、フランス語フィールドワーク奨学金をいただき、個人研究のためのフィールドワークをさせていただきました。元々、フランス語圏ということでコンゴ民主共和国(以下、コンゴ民)での活動で申請させていただきましたが、昨今のコンゴ民およびアフリカ諸国の状況を考慮し、フランスでの活動に変更をしたうえで認めていただきました。しかし、フランスでの活動の前に個人の責任の下、コンゴ民での活動を行ったため重ねて報告させていただきます。

## 研究概要

本研究は、国内に250以上の部族を抱えるといわれるコンゴ民主共和国において、今までの社会の中での部族に対する意識を明らかにした上で、今後の国家の変化と部族意識の社会的意義を考察するものである。

本研究のキーワードは“異文化理解”である。異文化とは生き方や価値観が違うことそのものであり、大きな意味では言語差や国籍の違いであり、小さな意味では隣人でさえ異文化である。つまり、日本人とコンゴ人という目に見えた異文化理解ではなく、コンゴ人同士の異文化理解に焦点を当て、文化を“部族”を原点とするものとした価値観として捉え、その相互理解のプロセスを考察する。そのための価値観の理解が今回のフィールドワークにおける要点である。

## 研究背景

本研究に至った経緯として長谷部葉子研究会(以下、長谷部研)への所属が一番の要因である。幼少期の海外経験から高校時代より海外志向があった私は、アフリカの地で活動している長谷部研を知った。当初は日本語教育を行うプロジェクトが立ち上げをしている時期であり、言語学にも興味を持っていたため日本語教育をコンゴ民で行う日本語プロジェクトに2013年春より所属することとなった。同年夏、初めてのコンゴ民渡航の際にコンゴ民国立教員大学での日本語教育のサポートを2週間経験し、現地で日本語を学ぶ大学生や日本語教授法を習得し、現在実際に教壇に立っているコンゴ人日本語教師とともに時間を過ごした。当時のコンゴ人との経験とその後の長谷部研内における個人研究の興味の変遷から「コンゴ民主共和国」という国の構造やその首都キンシャサに興味を持った。2014年春にはコンゴ民の歴史を中心に学び、国家体制の変化や言語や部族の多様さ、その多様性がもたらす政治・経済への影響を学んだ。

ここでコンゴ民について紹介する。



コンゴ民主共和国

首都:キンシャサ

人口:6,780 万人

国土面積:234,5 万km<sup>2</sup>

公用語:フランス語

他地域共通語が4つ

引用元:外務省データベース

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/congomin/data.html#01>

図1 出典: University of Texas Libraries

アフリカ中央部に位置するコンゴ民はその広大な国土と地下資源豊かな土地、国土を東西に流れるコンゴ川により、非常に豊かな国土を持ちながら世界最貧国といわれるほどに貧富の差が激しい国である。その原因として挙げられるのが歴史的な背景とそれに付随する民族や言語の違いである。コンゴ民およびコンゴ川周辺一帯は 17 世紀にポルトガル、18 世紀以降にベルギーの植民地となった。ベルギー植民地時代では他のフランス植民地以上の搾取が行われた。1950 年代後半のアフリカ諸国の独立に続いて 1960 年にコンゴ民も独立を行うことになった。しかし、時期尚早な独立であったために内乱が起り、1965 年にモブツ大佐が軍事クーデターを起こし、1971 年にザイール共和国に国名を改名、1996 年までの 20 年以上の独裁が行われた。その後、ローラン・カビラによるクーデターでコンゴ民主共和国に改名し、現在はその息子のジョセフ・カビラが大統領についている。この歴史の中にも部族による争いが関係し、コンゴ民という 1 つの国に統一できなかったのである。

部族を考える前に言語の差を説明する必要がある。コンゴ民の公用語はフランス語であるが、国内には 4 つの地域共通語(リンガ・フランカ)がある。リンガラ・スワヒリ・チルバ・キコンゴの 4 つである(図 2 参照)。東部にスワヒリ語圏が存在し、現在の大統領のカビラの出身でもある。首都のキンシャサはリンガラ語圏に含まれるが、郊外はキコンゴやチルバの語圏にすぐに到達する。以上の 4 つの地域共通語を中心に各部族の言葉が存在するといわれている。



図2 コンゴ民主共和国 言語分布図  
出典: Wikipedia

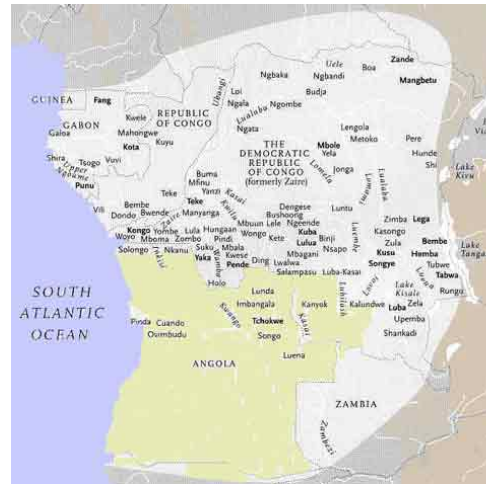


図3 コンゴ民主共和国 部族分布図  
出典: <http://www5.pf-x.net/~sapshima/african-masks.htm>

また、部族においては国内に 250 以上の部族が存在するといわれており、主に西部の海岸付近にコンゴ族、中央南部にルバ族といった言語に対応する部族から少数の部族までが混在する形となる(図3参照)。

以上の言語圏による区別や部族の違いから政治への影響が存在する。特に選挙に注目し、大統領選挙および総選挙の結果から投票行動と地域・部族との関わりの可能性を見ることとなった。過去 2 回の選挙において大統領であるカビラは 2 勝しているものの、議会の選挙では最多議席を確保しているものの過半数をとったわけではない。それどころか 100 以上ある政党があるせいで 500 議席のうち 65 議席しか確保できていない。政党が 100 以上ある原因の1つが部族という単位である。しかし、投票の細かいデータの取得は困難であるために投票行動と部族への意識の関係性を明らかにしようとしたことが本研究につながってくる。

その後、長谷部研のコンゴ Acadex プロジェクトの活動の範囲及び過去に渡航した際の首都キンシャサにある国立教員大学の日本語の授業のサポートを行った経験からキンシャサという首都の町に焦点を絞って部族の意識の調査を行うにこととした。次回の選挙は 2016 年までな

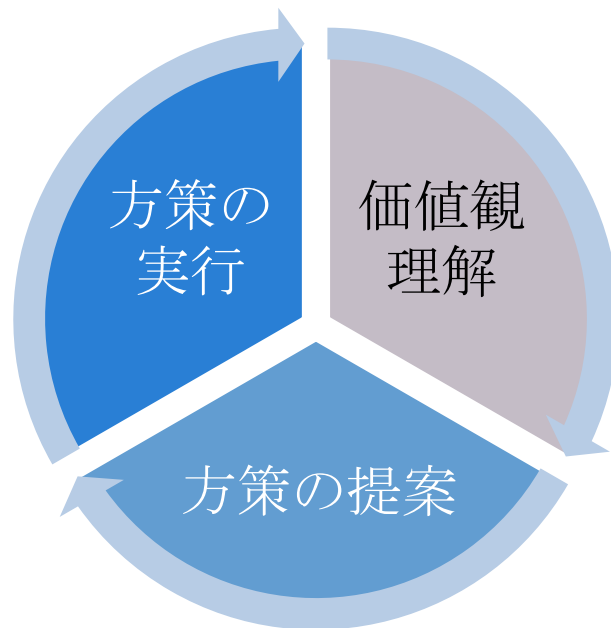


いため、実際の投票と意識の調査を行うことは不可能であるが、現時点での“部族”への価値観を調査することは可能である。今回のフィールドワークではコンゴ民首都キンシャサでの調査に加えて、フランス・パリのアフリカ人街に居住するコンゴ人の価値観までを調査し、比較検討することを目的とした。

## 研究意義

本研究を半永続的に続けた場合の最終的なゴールは「コンゴ民主共和国の首都キンシャサを始点とするコンゴ人同士の相互理解を促進し、ナショナルアイデンティティの創出に寄与することで国家の真の統一に影響を与えること」といえると思う。つまり、コンゴ人同士の価値観の相違や文化の差を乗り越えるためのプロセスを考察し、外部者としての日本人が関わることにより相互理解を実現するための方策を考案し、首都キンシャサを中心に実行することによってコンゴ民国内に波及させる可能性を模索することである。

本研究の流れを図式化すると以下の図のようになる。コンゴ人の価値観の理解をもとにコンゴ人同士の相互理解を進めるための方策を考案する。考案した方策をコンゴ人に提案し、実行していく。そこから生まれた変化をもとに新たな価値観(価値観の段階)の理解を進め、繰り返していく。その規模を徐々に大きくすることで国主導のトップダウン的な意識改革ではなく、国民からのナショナルアイデンティティの創出への貢献を目指していく。



“コンゴ民主共和国出身”というナショナルアイデンティティの創出

実際のゴールであるナショナルアイデンティティの創出に向けては何年必要かは見通しがつかない。しかし、上のサイクルを回すことは大学生の間で可能な範囲であり、ここが“研究”としての意義となる。

首都のキンシャサを取り扱う理由としては、多くの部族出身者が首都に集まること、首都にはあらゆる国家機関が集まり、影響力があるのではないかとすることを念頭に、コンゴ民全体への影響力を考えると首都の重要性を必要とする。

ナショナルアイデンティティの創出という点まで着手する場合は、国家がそれを求めているということが確認できれば非常に大きい。しかし、その逆で現在の政治体制を維持したい場合はただの目障りでしかなく、非常に危険ともいえる。そのため今年度しか活動できない本研究者としては異文化を持つ日本人との接触を機に、コンゴ人同士の相互理解へのきっかけづくりを進めていく。

## 春期フィールドワーク

### ・計画

今回のフィールドワークはコンゴ民とフランスの2か所で行う。

目的は部族に対する意識の調査を行い、比較検討するためである。部族が今までの自分の価値観やこれからの選択にどう関わっているのかを聞き、これからのコンゴ民の在り方までを問う。

調査対象はコンゴ民とフランスで少し異なる。コンゴ民では首都キンシャサに住むコンゴ人(主に国立教員大学の大学生)を対象とする。その際、かねてより親交のある国立教員大学の日本文化センターで日本語を教えているコンゴ人日本語教師に協力を仰ぎ、彼の日本語の授業に来る学生と彼らが大学内で持つ英語の授業の学生を対象とした。フランスではフランスに移住したパリ18区を中心とするコンゴ人を対象とし、同様の質問を行う。各国の調査をもとに個別の結果の考察を行うとともに、国内での考え方と国外を知ることによる意識差があるのかを考察するものとする。

手法としてアンケートによる量的調査とヒアリングによる質的調査である。アンケートでは基本情報(姓、名、国籍、出身地、部族、言語、性別)を記入したのち、職業選択や結婚などの人生における選択と部族の関係、政治と部族の関係、コンゴ民の今後に関してなどを聞く質問を1(否)~5(肯)で回答してもらう。なお、仏語のアンケートを作成したがその下に英語で同様のことを表示した。

※以下、アンケート(添付資料①)より抜粋

### <Sensibilisation de la tribu :1~5>

- 1.La tribu est importante dans votre vie.
2. Quotidiennement, sentez-vous la différence entre les tribu.
3. Quand vous décidez de la profession, la tribu est liée.
4. L'éducation des enfants est liée à la tribu.

5.Est-ce que la décision du choix de votre conjoint est liée à la tribu?

<Politique et tribal :6~10>

6. Vous n'êtes pas satisfait de la politique actuelle.
7. Les partis politiques sont trop nombreux.
8. Pensez-vous que la politique est liée à la tribu
9. Vous devriez donner la priorité au pays que la tribu.
10. Lors des élections, la tribu influence-t-elle votre choix ?

<Capital et tribal :11~13>

※Personnes ayant une expérience qui vivaient à Kinshasa Se il vous plaît répondre.

11. Il y a-t-il des communautés de tribus à Kinshasa.
12. Il y a des moments où vous vous sentez la différence des tribus à Kinshasa.
13. Il y a un conflit en raison de différences dans la tribu à Kinshasa.

< Dans la futur en RDC >

14. Pensez-vous qu'en RDC, il est important de travailler sans distinction tribal?
15. Pensez-vous que l'attachement tribal est-elle importante pour l'avenir de RDC ?
16. Raison de la réponse 15. (Reason for the answer 15.)

ヒアリングでは主に部族と文化の関係性から政治に話を移しつつ、今後のコンゴ民の在り方を問うようにした。本研究者の語学力の不足もあり、十分な理解をしてもらうことが困難であることが予想され、コンゴ民では主に関係性がある人間を中心に行うこととした。逆にフランスではアンケートよりもヒアリングの方に比重することにする。なぜならば、初対面で事情を説明したうえで答えてもらうことになるためにコミュニケーションを取りながら進めていく必要があるからである。

<各国のフィールドワーク概要>

・コンゴ民主共和国

期間:2月14日～3月1日

滞在場所:首都キンシャサ市内 国立教員大学学生寮

調査対象:国立教員大学の大学生他

手法:アンケート中心(ほとんど記入の場に立ち会わず)

・フランス

期間:3月2日～3月24日

滞在場所:首都パリ ホームステイ

調査対象:パリ18区のアフリカ人居住区のコンゴ人

手法:ヒアリング中心(アンケートを片手にコミュニケーションを取る)

・フィールドワーク内容

1.コンゴ民主共和国

滞在中につけた日記をもとに研究活動にかかわる点を抜粋する。

2月14日。早朝にコンゴ民首都キンシャサ郊外のヌジリ国際空港に到着。以前渡航した際にお世話になったコンゴ人の友人に迎えられてタクシーで市内の国立教員大学に向かう。国立教員大学に着くと、日本文化センターの管理人であり、コンゴ人日本語教師であるY氏が出迎えてくれた。彼が今回のフィールドワークにおける非常に重要な協力者である。Y氏は日本語習得歴4年で2012年に約3ヵ月日本への渡航経験があり、フランス語、現地語であるリンガラ語、日本語を流暢に操ることができる。到着した日は在コンゴ日本大使館主催の日本映画鑑賞会が日本文化センターで行われる予定であり、Y氏はその責任者として働いていた。友人のM氏(日本語学習歴3年、2014年6～8月に日本渡航経験あり)に案内を頼み、キンシャサ市内のマーケット街でWi-fiと携帯電話を購入。その後映画鑑賞会のための集客を手伝う。上映後、日本語を習うコンゴ人学生と部族について会話をすることとなった。フランス語と



英語を併用しながらアンケートを片手にヒアリングを実施。彼はアンケートの質問一つ一つに具体例を示したりしながら自分の見解を話してくれた。主に、

- ・友人の出身部族を知っており、時折その慣習の違いを受け入れがたい時がある。
- ・住居や職の決定には同じ部族がいると有利になる。
- ・結婚の時に慣習の特色が出やすい。
- ・選挙の投票に直接的に影響が出る。
- ・現在の第一党がスワヒリ語圏の政党であることによって不平等がある。
- ・これからコンゴ民は部族を超えていく必要がある。

ということを話してくれた。初日にこの話を聞いたことで、アンケートによる量的調査の結果として“部族への意識はあるものの、これからのコンゴ民に関してはそこを気にしすぎてはいけない”という仮説を確信をもってたてられるようになった。

2月15日。日曜日だったこともあり、大学の授業はなく、学生の姿は寮に住む学生以外は見当たらない。人によっては教会に行く人も多いが、町の人々の往来も平日の3~4割減である。その夜にY氏の友人のお宅に夕食を招待された。Y氏とその友人と友人の母親と食事をし、友人の母親に話を聞くことができた。50~60歳の母親はコンゴ民南部のカサイ州出身でチルバを主言語とする部族の出身であった。旦那は部族は違うものの、同じチルバ語を話し、慣習の差がほとんどなかったということ話を話してくれた。これからのコンゴ民について聞くと部族の問題は歴史に基づいてコンゴ民に根付いている問題だから部族を超えての統一は難しいだろうと答えた。

16、17日はCPUという国際保険の登録や大使館訪問、生活の準備のための買い物などを行った。平日になって気づいた問題があった。滞在する2週間が国立教員大学のテスト準備期間とテスト期間だったのである。つまり、学生が常にいるわけではなく、日本語のクラスも非定期での実施となっていた。そのため、非常に計画を立てづらく、動けるときに機を見て活動していくこととなった。

2月18日。日本文化センターでY氏とともに日本語教師として働くE氏がアンケートに答えてくれた。E氏は2012年夏に長谷部研のメンバーが渡航し、サマーキャンプをコンゴ人と共に行った際に他のコンゴ人に対して部族の違いから責め立てたと聞いていた。そのため、彼の回答は部族への問題意識が強いと予測していたが、結果としては真逆だった。部族は自分にとって重要ではないという答えと部族の違いを意識しての発言があったことの違和感が残った。

2月22日。Y氏の親戚が近日結婚するということでその婚前の儀ともいえる夕食に立ち合わせていただいた。その際のやりとりがコンゴ民での特徴らしい。新郎側が親戚を連れて新婦側に行くことから始まる。

新郎側「結婚をしたく、娘さんに会いに来た。」

新婦側「娘とはどのような人だ？」

新郎側「～な人だ。娘さんに会いたい。」

新婦側「娘は遠くに行っている。お金がないと探しに行けない。」

新郎側(お金を渡す)

新婦側(娘登場)「ご飯にしましょう」

というやりとりを行う。この時が新郎新婦の家族の初対面ということとなる。結婚の際の贈り物は部族や地方で異なるらしい。

2月23日。Y氏に本格的にインタビューを行う。Y氏はコンゴ民東部のマニエマ族でスワヒリ語圏の出身である。話の内容は主に部族と文化の差、政治への意識の2点である。部族と文化の関係性で注目すべき点は“食”に関してである。語圏、部族によって主食が違う。ルバ族はキャッサバと小麦粉を練り混ぜたフフを主食とするが、コンゴ族はちまきに似ているクワンガを主食とする。フフは全国的に食べられているものの、ルバ族だけは手でちぎったのちに丸めるといふ。各部族で食文化や食事方法が違うというならば“コンゴ料理”とは何なのか。政治への意識ではY氏は「コンゴ人は民主主義を理解していない」と言い放った。キンシャサの選挙

区で一番政治家として評価される者を選ぶのではなく同じ部族の人間に投票しているといい、今の大統領でさえそのことによって選ばれているという。2016年に大統領選を控えているが、今のカビラ大統領は憲法で3選が禁じられており、出馬することができない。出馬自体をめぐり、憲法改正までの議論に及んでいたが(他のアフリカ諸国では憲法改正から独裁に移行する国も多い)、2015年1月の暴動から可能性は低くなった。では、次の大統領は誰かと聞くとカトゥンビを挙げた。現在のカタンガ州(コンゴ民東南部の州)の知事で、部族や地域をひいきしないいい政治家だと評した。今までの選挙から現大統領陣営の対抗馬として出ていたチセケディなどが有力かと思われたが新しい名前が挙げた。この点は今後も注目したい点である。

2月27日。Y氏の同僚のE氏と同じく日本語教師でありプロジェクトに初期からかかわっているC氏の2名がそれぞれ受け持っている英語のクラスの生徒に対してアンケートを実施した。各20名前後だが、さまざまな部族出身の同年代の大学生の量的調査は行うことができた。しかし、同席しているわけではなく、どこまで問題の意図を理解しているかを把握しているわけではなくその回答の信用が絶対ではない。ヒアリング主体で数よりも質を考慮すべきだということが次へ生きる経験といえる。

アンケート(添付資料②)の結果は有効回答数64で数名基本情報の一部や回答の一部が無記入であった。結果を所属で振り分けたものが資料になっている。以上の結果より2点注目すべき結論を挙げられる。

- ① 自分の部族を意識し、他者の部族との差を知っていること
- ② コンゴ民は“統一”すべきであるが、“統一”する際に部族は重要ではない。

という2点である。

まず①についてだが、問1・問2の平均値が4を超えていることからこのことが言えるわけだが、この回答値が低かったグループに関して共通項(年齢、部族、性別)は見られなかった。

次に②に関しては問14の回答平均値が4.23と他の問いに比べて最大値であったことが見て取れる。また、問15(聞き方が逆質問的になってしまったが)において低い値を出している。

ここに関しても逆に高かったグループの共通項を見つけるのは困難だった。

部族に関しては 64 という数では部族数に対して有効回答数が少なく、傾向を考察するには物足りなさが残ってしまう。出身地も同様の結果となってしまう。そのため、今回は単なる回答結果から証明できる単純事項に重きを置くこととした。

## 2. フランス

フランスでのフィールドワークは 3 週間行った。1 週目はコンゴ民との気温差や体調の変化に気を付けるためにパリ市内散策を中心に計画を立て直した。コンゴ民に滞在中にパリに在住するコンゴ人留学生を友人から紹介してもらい、彼と連絡を取りつつ進める算段を付けた。彼に対するインタビューとパリ 18 区のアフリカ人居住区に住むコンゴ人に対するアンケートおよびインタビュー、在仏コンゴ民大使館の訪問の 3 つを軸に立てた。

第 2 週に調査を開始した。パリ 18 区周辺を散策し、18 区北部に 10 弱のコンゴ民の国旗を掲げる食料品店が存在することが分かった。そこにはコンゴ民の主食であるフフの粉やポンドゥという野菜などが売られている。どこの店もほとんど同じ品揃えである。散策の中で 3 名に試しでアンケートを取った。1 名はファーストフード店で食事をしていた時に隣の 2 人組がリンガラ語を使っていたのがわかり、話しかけたところ 1 人はアンゴラ人、もう 1 人がコンゴ人で彼にアンケートをお願いした。あまり読み書きが得意じゃないらしく、アンゴラ人の友人に説明してもらいながら答えてくれた。彼は出稼ぎのようであった。2 人目はコンゴ民食料店に来ていた高齢のコンゴ人女性である。彼女は眼の悪さもありアンケートの文字が読めないようなので説明しながらアンケートの質問に答えてくれた。ザイール共和国時代にフランスに移住し、40 年が経つらしい。3 人目はコンゴ人ではなく食料品店で働くコートジボワール人の男性である。コートジボワールはコンゴ民と多部族国家であり、語圏が分かれていることなど国情が似ているので比較対象の一つの可能性として話を聞いてみたのである。

3 週目に向けて友人に紹介されたパリ在住のコンゴ人と連絡とりつつ、上記の 3 名のアンケートを取ったところで問題が起きた。2 週目の金曜日(3 月 13 日)に高熱が出てしまい、薬を飲んでも熱が下がらずに頭痛と悪寒が止まらない。15 日の夜にホームステイファミリーに状況を

伝え救急に行くこととなった。その際にアフリカへの渡航の直後であることを伝えるとエボラ出血熱を疑われたもののマリアの可能性が高いことを伝えた結果スムーズに診察までいった。しかし、点滴を打ったり病棟へ搬送されるまでは数時間待たされる結果となった。

検査の結果、マリアと分かり4日間の入院をし、退院後も体力がすぐには戻らなかったため調査を中断せざるを得ない状況になってしまった。友人に紹介されたコンゴ人にも会う機会を逸し、大使館訪問もアポさえも取れず実現しなかった。結局、志半ばでフランスでのフィールドワークは断念することとなった。

## 考察と今後の展望

フランスでのフィールドワークは途中棄権という形になってしまったものの、コンゴ民でのフィールドワークの調査結果から自分の部族に対する意識の強さとこれからのコンゴ民がどうすべきかを若者は描けていることがわかる。今回は国立教員大学という教師を目指す大学生と日本人とのかかわりが深いプロジェクト関係者の日本語教師や日本語学習者を対象としたためこのような結果が出たのかということ、比較できるように準備を進めていく。また、部族の数に対して調査の対象者が少なすぎたことが問題であり、絶対数自体を多くしていく必要がある。さらに、その場合の手法を質的とするか量的とするかを慎重に考慮する必要がある。

これからのコンゴ民の希望的展望を語るコンゴ人はいたが、実現について具体的にどうすればいいのかということは話に出ることはなかった。実践、実現ということを念頭に置いて今夏の渡航(予定)に向けて準備を進めていきたい。主に考えるべきなのは第三者である日本人の本研究者がコンゴ人同士の相互理解の促進に向けてどのようにかかわるかということである。コンゴ人はそれぞれの個性は認めているように思えるがその潜在に部族があるということが今回の調査結果であるため、何を超えれば相互理解ができている状態でかつナショナルアイデンティティの創出につながるのかということ定義する必要がある。日本人が関わることでコンゴ人以外の異質性に触れることによるアイデンティティへの影響とワークショップやコーチングなどを用いた相互理解促進の2軸をもって計画を進めていく。



おわりに

今回のフィールドワークを通して痛感したことが2点ある。

1つ目は準備の質である。今回はフランス語(および英語)でのヒアリング調査を行うことがあったため、フランス語でアンケート用紙を作成した。しかし、ヒアリングを行う際に「私は何者か」、「調査概要」、「調査の目的」、「期待される効果」、「結果」などを伝えるための準備が至らなかったこともあり、不信に思われてしまった場面もすくなくあった。語学力だけでなく質問事項も含めて目的を明白にして納得して協力してもらえようような努力を怠ってはいけない。

2つ目は「人間万事塞翁が馬」ということである。つまり、何が起こるか分からないということで、今回はフランスでマラリアを発症してしまった。マラリアは熱帯地域の夜に出る蚊に刺された場合1000分の1の確率で発症するといわれている。蚊よけのために蚊帳などを使用してコンゴ民での生活を過ごしていたが、それでも発症してしまったのである。避けようがないとはいえないが、起こってしまったものを受け入れ、そこから何を考えるかということでは非常にいい経験となった。パリの病院事情も実際に見ることとなり、マラリアに対する理解や対応の速さがある一方で、熱帯感染症病棟には黒人やアジア人が多く見られた。フランスの新たな一面を垣間見た。断念したことに悲観せずに、落ち着いて次の行動を考えられたのは自らにおいて収穫であった。

## Le résumé

La présente étude qui a été effectuée au sein de la République démocratique du Congo, pays qui compte plus de 250 tributs avait pour but de clarifier, autant que faire se peut, à la fois ce qu'est la conscience tribale dans la société congolaise et les effets qu'elle ne laisse pas d'apporter dans la vie nationale du pays.

Le mot-clé que nous avons choisi a été celui de « la compréhension interculturelle », qui suppose d'emblée la différence culturelle non seulement entre les nations comme le Congo et le Japon, mais aussi entre les tributs qui se trouvent voisins les uns avec les autres et qui sont les composants de la nation qu'est censée être la République démocratique du

Congo. Or nous avons été amenés à constater qu'existe bel et bien au Congo un favoritisme politique et social basé sur la conscience tribale d'autant plus persistante qu'elle est parfaitement tacite, et qu'il demeure encore assez difficile pour chaque Congolais de s'élever au-dessus du tribut auquel il appartient, ne serait-ce que pour s'affirmer en tant que Congolais.

Ainsi, à l'issue de ce travail de terrain, j'ai ressenti le besoin de mieux comprendre la relation entre l'identité ethnique et l'identité nationale telle qu'elle se trouve chez les Congolais. Et c'est précisément dans cette direction que, désormais, j'ai l'intention d'orienter mes recherches dans le proche avenir.

Hajime Makino